

## 同時通訳の質の向上に資する言語表現について

西尾 道子

最終講義では、これまで自分がどのような仕事をしてきたか振り返り、後半で同時通訳でどのような言語表現を使用すれば同時通訳が通訳者にとっても、聞き手にとってもわかりやすいものになるかについて簡単に触れてみたいと思います。

大学を出て働き出したときの肩書きは会議通訳者でした。会議通訳者というのは、文字通り小さくても大きくても会議なるもので、通訳をする人という意味で、通訳の形態には大別して二つあります。逐次通訳と同時通訳です。大学に就職してからは、会議通訳をしていたときに実際にやっていた作業がどのようなものか、そこではどのようなことが問題であったのかを、主に語用論の立場からいろいろ見直したということができると思います。

逐次通訳と同時通訳という二つの通訳形態の違いを考える前に、まず、翻訳と通訳の違いを考えてみましょう。翻訳は視覚情報を使用しているため、通常、翻訳者が何度でも原文を読み返して翻訳し、読み手も何度でも翻訳文を読み返すことが可能ですが、通訳は聴覚情報を使用するため、一瞬にして音が消えてしまうものです。通訳者が原発言を聞くときもそうですし、聞き手が通訳を聞く場合もそうです。視覚情報を使用する翻訳では原文と翻訳文をつきあわせて検討することが可能なため、文の意味内容ばかりでなく、文の形式的なこと、たとえば単語の品詞とか、文において当該部分が主文に位置しているのか従属文に位置しているのかといったことも翻訳文において原文に近づけることが可能です。

しかし、音が一瞬に消えてしまう通訳においてはそのような吟味をすることは通常不可能です。形式的なことが揃えられれば揃えるとしても、まずは、原発言の持つ意味内容が正しく伝わるかどうかということに重点が置かれることとなります。Nida (1964) のいう読み手や聞き手への効果という内容上の等価性を重視する立場です。これは内容的に等価と見なされれば形式的には差異が見られたとしても誤訳ではないと捉える立場です。翻訳においても通訳においても「誤訳」なるものが少ないほど望ましいのは言う

までもありません。

次に通訳の種類に話を戻しますと、逐次通訳は、通訳者が原発言を聞き終わってから通訳文を産出する方法ですが、同時通訳は通訳者が原発言をオンラインで処理し、多くの場合原発言が終わる前に通訳文を産出する方法です。このような簡略な定義からだけ判断すると、同時通訳の方が逐次通訳よりも圧倒的に難しそうに思えます。確かに技術的には同時通訳を困難にする要因があって、それについては後述しますが、実際に通訳者として仕事をする場合、逐次通訳の方が易しいというわけではありません。理由はいくつかあります。

まず、世の中には英語のわかる人たちが多くいて、逐次通訳ではその人たちが容易に通訳の善し悪しを判断できるという事情があります。そのため、原発言の再現率がかなり高くないと、(おおざっぱに言って9割くらいは再現されないと、)よい通訳とは判断されないのです。同時に、誤訳も指摘されやすいといえます。通訳では意味内容の等価性を保持するために原発言の話し手がどのように論理を展開しているかに着目し、その論理を追うことに重点が置かれますが、状況・目的によって原発言と通訳文の呼応の仕方が異なることがあります。その結果、論理の追い方が少し異なっていると聞き手に判断されたり、訳出に使用されている単語や表現のニュアンスが原発言のものとズレていると判断されると白を黒と訳出していなくても誤訳と言われることがあります。また、原発言では3つの形容詞が並んでいたのに、形容詞を2つしか訳出しないなども、当然誤訳と判断される可能性があります。

もう一つ逐次通訳で難しいのは原発言の最後の部分の処理です。逐次通訳では、原発言が終わると音が途切れてしまいます。そのときに通訳者が自分の手元のメモをとり終えていなくても、誰も話していないという無音の時間が多いのは望ましいことではないので、最後の部分はメモなしで、その部分を記憶して後で再現するか、その部分を忘れる前に音声化してしまう、つまり、通訳文の順序を変えて、最後の部分から最初に訳出してしまうといった処理がされることとなります。通訳者が疲れている時などは、記憶しているはずの最後の部分が頭の中から消えてしまったりして、最後の部分が通訳文から抜けてしまうことがあるので記憶して後で再現するのは存外に難しいものです。では、常に順序を変えて原発言の最後に出てきた部分を通訳文の最初におけるかということ、これも難しい場合があります。時間軸に沿ってコトが展開しているときなど、結果と原因が逆転してしまったりするのです。最後の部分を落とさずに必ず訳出するのは案外難しいのです。

というわけで、逐次通訳がやさしいとは限りません。このような会議通訳の仕事を通じて気になっていたのはどのような場合に誤訳をしたことになってしまうのかとすることでした。また、日本語を英語に訳す場合にどのように論理をたてるかにより訳文が意図したように理解されるかどうか大なる影響がでることにも気がつきました。必要なものを補うことなく日本語を直訳してしまうと、日本語は後で述べるように文の要素がすべて明示的に表現されなくても成立するので、一応文法的に正しい英文を訳文に使っていても、特に質疑応答のような英語の母語話者とのやりとりが多い場合には必ずしも望ましい答えが母語話者から引き出せるものではないということにも気がついたのでした。

本学着任後は、英語のライティングのクラスを早くから担当しましたので、ライティングにおける日本語と英語の論理の組み立て方の違いについて考えることとなりました。また、直接クラスは担当しませんが、どのような場合に誤訳と判断されるのかという問題に関連して、同時通訳や、字幕翻訳のように何らかの時間的・空間的制約下で行われる通訳や翻訳がどのようにして意味内容の等価性を保持しているのかという問題にも興味を持ちました。同時通訳の場合で考えてみます。

同時通訳には英語を日本語にする英日通訳と日本語を英語にする日英通訳とありますが、問題となることが異なっています。その大きな原因は英語と日本語の語順が異なり、文の要素が文内に生起する位置が異なることです。まず、英語は文で主語 (subject)、動詞、(verb) 目的語 (object) の順に生起する

SVO 語順で、この語順が現実使用される語順であることが多い言語です。それに対し、日本語は主語、目的語、動詞の順に生起する SOV 語順でしかも必ずしもこの基本語順が使用されるとは限らない言語です。日本語では主語や目的語は明示的に表現されなくてもよいのです。

また、英語と日本語では文頭付近に生起する文の要素も異なっています。

たとえば、文の極性（文が否定文か肯定文か）は英語では比較的頭に近い位置に生起しますが日本語では文末近くに生起します。

- (1) a. ジョンは中国に行く。
- b. John goes to China.
- (2) a. ジョンは中国に行かない。
- b. John does not go to China.

モダリティ（話し手が文の内容の蓋然性について持つ判断）でも同じような現象が見られます。

- (3) a. ジョンは中国に行くかもしれません。
- b. John may go to China.
- (4) a. ジョンは中国に行ったかもしれません。
- b. John may have gone to China.
- (5) a. ジョンは答えを知っているに違いない。
- b. John must know the answer.

時制、アスペクトについても同じような特性が見られます。

このことから、同時通訳は英日通訳の場合と日英通訳の場合では、言語表現上注意すべき点が異なってきます。英日の同時通訳では、文頭に近い位置で、極性、時制、モダリティ、アスペクトなどに関する豊富な情報が得られます。ただし、英語から日本語に通訳すると音節数が増えるので、それをうまく処理しないととんでもなく早口の通訳となってしまいます。例をあげると、I think that Japan should promote international cooperation. の文では、主文の I think を処理するのに、対応する訳語である「(私は)と考える」を文末まで待って訳出してもいいのですが、文が長くなりそうな場合には、動詞を動詞として訳さずに「私の考えでは」のような副詞句に変換してしまっただけで訳出し、文頭に近い位置で処理することも可能です。ただし、「私の考えでは」のような処理を頻繁にするとそれだけ音節数は増えがちです。そこでこれらの動詞のまわりにある情報をうまく処理することが重要となります。

音節数に関しては Thank you (very much) がそれぞれ 2 音節と 4 音節であるのに対し、「ありがとう(ございます)」が 5 音節と 10 音節となることからわかるように、日本語では母音が多く出てくるため、音節数が英語の 2 倍にはならないとしても、3 割増しくらいになるといわれています。どのように音節の極端な増加を抑えるかが重要です。

日英の同時通訳では、文の開始後あまり時間がたたないうちに、日本語の原発言ではまだ得られていない動詞や動詞に付随した情報を推測し、英語の通訳文にいかにか盛り込むかを考えなくてはなりません。日本語の原発言で使われる副詞から極性やアスペクトに関する予測を立てるのも一つの方法です。

もう一つ難しいのが、何を通訳文の主語とするかです。日本語では文の主語や目的語が明示的に表現されないことがあるため、何が日本語の原発言の主語かを特定することが難しい場合があります。原発言の文の主体が人間だと通訳者が判断できるが誰が主体なのかまでは特定できないような場合、人称代名詞が

主語として使用されることがあります。特に不特定の複数の指示対象を持つことができる複数人称代名詞 we, you, they といったものは通訳文をあまり構文的に複雑にすることなく、通訳者にとっても、通訳を聞く人々にとってもわかりやすい文を作る手立てを提供してくれるため、日英の同時通訳においては便利な存在だと言うことができるでしょう。

このように、同時通訳では文の語順が日本語と英語とで異なることによる技術的な難しさがありますが、時間的に制限がある場合、複数の言語が同時に使用されるような国際会議などではなくてはならない存在になっていて、どのような言語表現上の工夫がされているのかということについて言語学的な観点からさらに解明されなくてはならない問題はたくさん残っています。(例文の関係で一部改変しました。)

## 参考文献

Nida, E.A.(1964). *Toward a Science of Translating: With Special Reference to Principles and Procedures Involved in Bible Translating*. Leiden: E J. Brill



西尾道子教授最終講義 (2010.3.13)



学生から花束贈呈